



日刊 千葉労働動力

怒りの日、5.28を 反撃への転機に！

われわれは、5・28反動判決を断じて許さない。怒りの日、5・28を反撃への転機としよう。東京地裁は、橋本政権の走狗となり、法匪と化した。5・28反動判決は、国鉄闘争をつぶし、労働者の権利を奪い尽くすことだけを目的とした、裁判の名にもあたらない政治的策謀だ。

**恐れるものはない！
我々は闘いを止めない**

5月28日、判決公判に結集した多くの国労組合員・家族の目には、厳しい闘いを貫いた11年間の万感の思い、くやしさが込み上げ涙があふれた。しかしこの涙はやがて怒りに変わった。「何も恐れるものはない。反動判決ならさらに団結して闘いぬくまでだ。その体制はできていく。あくまで『解雇撤回・地元JR復帰』の日まで闘う決意だ」「ひどい判決だ。しかし敵も困るだろう。なぜなら、われわれは闘いを止めないからだ」。怒りの声は否応なく、国労執行部の和解―政治決着路線への疑問としてもぶつつけられた。「下手にでいてこのさまだ！」。

●世界に恥ずかしい判決

判決に対する怒りの声は、全国に広がっている。「世界の物笑いになる判決だ。労働委員会という公的機関に従わないJRもおかしい」(評論家・佐高信さん)。「不況によるリストラの中で、多くの労働者が職を奪われつつあり、単に国労だけの問題ではない」(立教大学教授・新藤宗幸さん)。「この判決で、経営者の間に不当労働行為はやり得という雰囲気が出ることに心配だ」(ルポライター・鎌田慧さん)。

**われわれは、
国鉄闘争の原点に還る**

まさにひどい判決だ。しかし5・28判決は、事態を限りなく鮮明にした。われわれは、この判決を「闘いの原点に還れ！」という天の声として聞いた。

●敵の意志は明確だ

橋本政権は、5・28判決をとおして、彼らの意志をむきだしにした。国労と国鉄闘争を、あらためて、あくまでも叩きつぶさなければいけない対象として認識し直したということだ。

しかし、考えて見ればこれは、国鉄分割・民営化攻撃が開始さ

れて以来11年間の全ての経過を見ればつきりとしていたことだ。われわれの闘いが、この攻防戦の決着を許さなかったがゆえに橋本政権は、今また同じことを繰り返すしかないのだ。

●敵は困り果てている

それともう一点、橋本政権は、11年に及ぶ不屈の闘いに困り果て、恐れているということだ。

国鉄闘争が、支配権力にとって、どうでもいい存在であるならば、まともな理由ひとつなく、労働委員会命令まで覆して、このような強権をふるう必要はないはずだ。逆に言えば、われわれの闘いと存在を、決してあなどることのできないものとして見ているということだ。支配権力は、労働者の闘いを恐れたからこそ、戦後労働運動の大転換―解体を狙うきわめて大がかりな攻撃として国鉄分割・民営化攻撃を仕掛け、11年間にわたって不とう不屈の闘いが貫かれるという、誰も予測し得なかった事態に直面して、5・28判決を下したのだ。本質は、何ひとつ変わって

はかないのだ。

●闘いを潰す手段はない

そしてもう一点、橋本政権は、闘いをつぶす手段を何ひとつもっていない。このことを自信と確信をもって確認しよう。実際のところわれわれは、呵責ない攻撃をひとつひとつはね返して、この11年間、誰に頼ることもなく自活体制を築き、自らの怒りと団結と、そして全国の多くの仲間たちの支援の力だけに支えられて闘い続けてきた。また、JRの本体でも、JRとJR総連・革マルによる、言語に絶する卑劣な差別・組合つぶしの嵐のなかで団結を守りぬいた。

橋本政権が何と言おうが、裁判所が何と言おうが、彼らは手のだしようがない。彼らにできるのは、強権をふりかざして団結と闘いの戦列を萎縮させることだけだ。ここに5・28判決の本質がある。われわれがなすべきことはかつてなく鮮明だ。一〇四七名の闘争団を先頭に、新たな質をもった団結をうち固めることだ。そして、勝利の日まで闘いの道を貫く。

**一切が力関係によって
決まる時代の到来**

もう一点、5・28判決は、一切が力関係によってしか決まらない時代が到来していることを鮮明に示した。これは、逆に言えば、支配権力の側が、余裕を無くし、危機にあえいでいるということだ。

日本―アジア―世界の経済危機、金融危機、政治的危機は、

とどまるところを知らず、体制そのものの崩壊が始まっている。日本の失業率は、戦後最悪を更新して四・一％にはね上がった。橋本政権は、金融機関救済に30兆円を投入し、景気対策に16兆円を投入し、その一方で、労基法の抜本的な改悪や有事立法の制定を強行しようとしている。

しかし、何をしようが出口もゴールラインも見えない状態だ。5・28反動判決は、こうした時代のなかで、労働運動がいかにあるべきかを、敵の側が教えてくれた貴重な経験だ。敵が国鉄闘争を恐れているのなら、11年間の国鉄闘争の地平を、全国の労働者のなかに広げていくことがわれわれの回答だ。決して不可能なことではない。11年もの間、なぜ全国の数十万もの労働者が国鉄闘争に惜しみない支援をつづけてくれたのか。国鉄闘争に、労働者と労働運動の未来を託しているからに他ならない。この意味でもわれわれ自身

●世界中で闘いが……

また、世界の労働者の闘いにも目を向けよう。インドネシアの民衆はスハルト体制を打倒し、韓国の労働者は、首切法案に反対するストライキを決定して、金大中体制を揺るがしている。フランスの国鉄労働者は、政府を追いつめるために、ワールドカップにぶつけて36時間のストライキを打つことを宣言した。われわれにもできないはずはない。5・28反動判決に、怒りの反撃を開始しよう。【つづく】